

# 地域支援ネット架け橋

ニュースレター 4月号

くすぶる灯芯を消すこともなく

2018年4月18日 発行 No.22



傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。

イザヤ書42章3節



## ◆東日本大震災7年目追悼会を終えて (文責：中澤 佳子)



追悼会に協力して下さった方々の  
慰労会



ホテルより海に向けて黙禱  
4人のアーティストによる献花

### ① 追悼セレモニー「愛と希望のコンサート」にて

先月の10日、南三陸ホテル観洋にて準備委員会主催の4回目の追悼会が行われました。地域支援ネット架け橋としては7回目の追悼会であり、被災者同士の関係や新しい地域の復興に福音を携えつつ、実践宣証していく時を迎えました。

ここに至るまでの働きには尊いネットワークの協力がありました。それは、気仙沼市、登米市、南三陸町、石巻市で活動するクリスチャンネットワークです。このネットワークは現地に強い愛の任務と福音を伝えようとする人たちで、人々の豊かな生活を心から祈るクリスチャンによって成り立っています。

そして年を追うごとに関係が深まり、今では「宮城三陸」と頭に名前が付くほどの大規模な協力関係となりました。その正式名は「宮城三陸3.11東日本大震災追悼記念準備委員会」です。

宮城三陸3.11東日本大震災追悼記念会のための実行委員会が立ち上げられて4回目となる今年の追悼会では「愛と希望」をテーマに行われました。失われた多くの魂を覚え、南三陸の海に向かい、170名の方が献花と共に定刻2時46分のアナウンスに合わせて黙禱しました。

震災を悼む3月11日当日は、被災地三ヶ所に会場を分け、それぞれの場所で追悼会を催しました。セレモニーでは心から復興を願う歌に合わせて、亡くなられた方々の分も生きることができるよう、福音を携えて幸せを運ぶことができるようにと決心を新たにされました。



ホテル観洋の女将さんから  
ご挨拶

## ② 女将さんの言葉

3月10日合同追悼会式典の最後に、追悼会の会場であるホテル観洋の女将さんよりご挨拶を賜りました。そのご挨拶の一部を紹介します。

「17,666名の人口の町が、800名以上の尊い命が失われ、211名が見つからない、このような深刻な事態が発生してしまい、難しさ、悲しみを抱えながら7年を過ごしてきました。

(中略)そして、町の復興と心の不安という問題は、新しい意識を持って、みんなで意識を変えながら、新しい心を造りあげていくものではないかということを実感することができました」

人の心のあり方を見出しておられた女将さんの思いを明かしてくださいました。支援と協働と協力を心がけてきた者として、女将さんのこの言葉の重みは身にしみて感じました。

そして、「私たちも『愛による姿勢』を追求し、たとえ時間がかかろうとも揺るぎなく使命感に立って進もう」と自分の心に刻む時となったのです。

## ③ 東日本大震災の直後、救命の働きに夫と共に南三陸町へ

私たちはそもそも、支援活動を行なっていくという働きは一切考えていませんでした。ですが、先にイエス様を知った者として「困っている人を見捨てない」という日頃の信仰生活を送ってきたことから、意識は迷うことなく困っている方へと向かっていました。

ちょうどその時、我が家と隣接する仙台銘菓「支倉焼」からお声がかかります。

「この震災で停電し、お菓子が各店舗に配れません。お菓子は何かの役に立ちますか？」

6,000個ものお菓子を受け取ると、すぐさま緊急支援チームと東松島市にある避難所に向かい、数ヶ所にてお菓子を配りました。その頃から、私たちのところに数々のボランティアが訪ねるようになりました。私たち家族は全員協力し合い、夫はファシリテーターとして活動を始めます。

その後、東松島市に点在する避難所支援に多くのボランティアが入りました。「長期支援を行うとしたら仙台市から通うには遠い」と感じた夫はより近くの困っている方への支援を考えたのです。

そうしたある日の朝、クラッシュジャパンの一員で震災直後から共に活動している方より「南三陸町にある志津川高校に来てほしい」という一本の電話が入りました。初めての南三陸町への道で戸惑いつつも無事に避難所に到着しました。この時から私たちは南三陸町に通い続けることとなります。

2011年3月26日、また一本の電話が入りました。千葉県にて支援活動されている看護師から「ミルク缶と水が必要です」と必死に訴えてこられました。その要望に応えるべく即物資を送りました。

その後、看護師の方は南三陸町を訪れた際、再び私に電話をかけました。「ホテル観洋付き保育施設『マリンパル』を至急訪ねてほしい」という依頼の電話です。物資を携え、保育園の先生方に会いに行きました。すると、保育園の先生の一人である三浦美香さんは「人が成長するために必要なものを与える仕事なのに、住む環境も、食べ物も、飲み物もありません。そして、人は物質だけではなく『心』が大事なのに、自分たちには何もない」とおっしゃいました。そのようなことに気づき、喪失の中にいらっしゃったのです。その話を聞いた私たちは保育園の先生方を支えることを決めました。



南三陸町志津川在住の  
三浦美香さん（左）と私

話は遡りますが、合同追悼会の会場となったホテル観洋は2011年10月頃まで避難所となっていました。避難された方は約700名から1,000名にも及びます。それはまさに被災者であるホテル従業員が被災者をサポートする日々でした。

ホテル避難所に住む方々にも様々な課題があり、支援を求める声が相次ぎました。「現在停電している建物の7、8階にお年寄りが避難しているのですが、夜間に高齢者のトイレがある5階まで連れていく介助が課題です」

「水がなく、食事は一枚の紙皿で3食頂いていますが、衛生上の心配があります」

「この2週間、大人が新生児の離乳食しか食べていません」

このような声をマリンパルの先生方や従業員が代わりに支援者に届けたのです。

その結果、次第に日常が改善されていきました。



しかし、私たちが南三陸町に通い続けるためにはガソリンが必要です。当時、ガソリンスタンドには行列ができ、ガソリンを入れられたとしても1,000円までという状況でした。その事情を知った青森の支援者は、東京・埼玉からの燃料を支援してくださいました。また、高速道を利用する際には、志津川高校避難所が依頼書を書いてくださったことにより、緊急車両車として登録することができました。

様々なサポートがあって私たちは避難所で過ごす方との関係を構築できるようになりました。また、避難所からの依頼によって隣接の避難所に物資を運ぶことも次第に増えていきました。

こうして避難所間で情報が共有されはじめ、より多くの被災者の方が「生活を取り戻したい」と協力を求めるようになったのです。そのお手伝いを通して私たちクリスチャンが理解されていきました。

#### ④ 祈りと宣証

最後に、私は家族全員の協力があつたことに感謝しています。家族全員が協力してくれなければ支援活動を行うことはできなかったでしょう。私たちは一日の活動を終えるとボランティアチームと一緒に家に帰ってきます。子どもたちはその人数も含めて、毎日自分たちの仕事を終えてから、夕食のための買い物に行き、料理をし、準備します。夕食を片付けてからは、次の日の活動のために支援物資を必要に応じて分けました。ある時には、往復6時間の道のりで心身ともに疲れていることを察した娘たちがスイーツを60個から100個を作り、提供できるように気遣ってくれました。手作りの方が茶話会は盛り上がりやすくなります。それからイベントがあるたびに手作りのお菓子を作ってくれます。

このようにして子どもたちも私たちが気遣いつつ、夫に相談しながら独自に支援活動を行い、信頼関係を築きました。

また、家族揃っての活動を見て他の支援団体も協力してくださるようになりました。そして、講演にも呼んでいただき、今の必要性を多くの人に知ってもらい、現在まで支援活動を続けています。

2018年受難週を過ごすにあたり、思い起こすことは常に変化が多い場所で必要性を迅速に知り、私たちに然りに対応してきたことです。同時に、互いを支え合う姿を通して「キリストの生きた教会」であることを現地で表し、日本人ならではの伝え方である「宣証」によって生き方を見せつつ前進しています。

今後も架け橋を覚えてくださいますことをお祈り申し上げ、応援して下さったことに感謝しつつ、筆を置きたいと思えます。

## ◆3月11日を迎えて (文責：中澤 竜生)

### ① 終始

先日、私たちにとっては**終始**と思う震災日を迎えました。終始とは、活動の見直しと今後の取り組みについて考えることを指しています。終始と思う理由は、これからも適切な支援活動を行っていきたく願うためです。

私は支援活動を行っている時、常に「活動する現場は生き物のようで、日々変化する」と感じています。つまり、過去の一年で学んだことが新しい年に活用できるとは限らないのです。特に、私たちの場合は「福音」というメッセージを背負って活動するのですから、なおさら現場での動きを読み取る繊細な心が必要です。

日々変化する特殊な状況下で適切な支援活動を行うためにはどうしたら良いか。それは、現場を離れることです。物事の全体像を客観的に把握するためには、時には支援とは関係のない場所に身を置いて現場を見るのが有益です。そうすることで、現場にいるときには見えなかったことに気づき、今後どのような支援活動が適切なのか考えることに行き着くのです。支援活動とは現場に身を投じることだけでなく、時には離れてみることも重要であると悟った終始の時でした。

### ② 落ち着いた生活を目指す

支援活動を行ううえで、私は復興住宅地に住む皆様には**落ち着いた生活**をしていただくことを目標としています。そのためには、即支援活動ではなく、様子を伺う時間が必要です。今年の3.11からの活動では、まず遠くから見守って様子を伺うことから始めます。

とはいえ、すでに相談を受けている方とは「助ける」ではなく、「助け合う」という双方の理解を育み、関係を深めていきます。例えば、扶助基金を利用する地域では、規則上一度利用された方は二度の利用はできません。二度利用するには条件として扶助基金に募金することが必要です。ですが、募金されない方が多くいて、何度も借りる世帯があります。

扶助基金委員会では、そういった方の生活事情を聞き、その方が生活改善に取り組むことができるようにカンファレンスを開きます。また、具体的なアドバイスをする際は愛をもって伝えることを心がけています。そして、福音も含ませつつアドバイスします。なぜなら、福音は反省と希望を与えるものだからです。

**ですが人の生き方は様々です。**私は支援活動での関わりにおいて、自分がクリスチャンであり、福音を伝える使命を担っているからこそ気をつけていることがあります。それは、その方の人生の指標を無理矢理洗脳するような関わり方をしないことです。信じる価値の尊さは伝えますが、信じたならばその方自身が今の人生に価値を見出すはずで

そう確信しているため、私はそのような伝達の仕方を心がけ、それぞれの生き方を応援する者でありたいと思うのです。そして、信じたならば、落ち着いた生活を目指していただきたいのです。

「また、私たちが命じたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くことを名誉としなさい。」

(テサロニケ人への手紙第一4章11節)

## ◆小中高生の被災地訪問の引率



3月後半、綾瀬東部教会より10名の小中高生が被災地を訪ねに来てくれました。毎年春に彼らが実施しているキャンプで、今年は南三陸町に訪問することが決まったためです。

4泊5日の旅程の中で2日間は漁師さんのお手伝い、それ以外の日は被災機構とクリスチャンの史跡を訪ねました。

クリスチャンの史跡見学の際、私はクリスチャンによる「愛の実践」の歴史の長さについて改めて考えさせられました。詳細は書き切れませんが、昔のクリスチャンには愛の実践がありました。それがゆえにクリスチャンの教え、生き方が広がったと思っています。

今回の震災でも多くのクリスチャンが愛を提供しました。それが今も続いております。クリスチャンだからできることを再確認した行程でした。

## ◆南三陸町クリスチャンセンターに滞在していた頃 (文責：中澤 義道)

### ① はじめに

先月で東日本大震災から7年の時が経ったことを覚えると「もう7年」「まだ7年」と時間の感覚が定まらない自分があります。ですが、あの震災を遠いものにしていいのかと考えた時、支援を経験した私は震災の出来事が風化しないように記録して語り続けていきたいと思いました。



2012年夏の南三陸町志津川

### ② クリスチャンセンターに滞在

2012年6月、南三陸町志津川の津波によってできた瓦礫が残る場所の上に「南三陸クリスチャンセンター愛・信望館」(以下、センターとする)が設置されました。設置するに至った経緯として、志津川高校避難所の被災者の方々から「近くにいて助けてほしい」という声があったことと、クリスチャン同士の情報共有の必要性がありました。

このクリスチャンセンターにて私はリーダーをサポートするサブリーダーの役割に任命されました。そして、3人のスタッフが与えられて、計5人のメンバーで滞在することとなったのです。センターにはカーテンがないため、朝は朝日と共に起床し、夜は一畳の畳の上で寝袋を使って寝る生活を送っていました。それは、センターを施設として利用するための配慮によるものです。

### ③ 滞在中の活動

センターに滞在することで、私たちはまる一週間をフルに活動に充てることができました。また「近くにいるからこそできる支援」が可能となったことで、現地に滞在する大きなメリットへとつながりました。

この「近くにいるからこそその支援」というのは、コミュニティ支援や子ども支援のことです。私たちは多くの仮設住宅に訪問し、一緒にお茶会やイベントを通して親睦を深めていきました。そうすることで、しだいに被災地に住む方々は「近所が近すぎるがゆえの問題」や「親と子どもの関係」などといった、身内や近所の人に話しづらい困り事を相談して下さるようになりました。

センターではそんな声を聞いて、多くの支援者に協力してもらうことでそれらの課題に取り組むことを目指しました。たとえば、親子関係についてはSolaに協力を仰ぐことで遊びや学習支援を行うことが可能となりました。また、支援がまだ行き届いていない場所では物資のニーズを聞いて提供することはもちろんですが、癒しや優しさを届けるために音楽カフェなどのリラックスできる場所を用意しました。

#### ④ 活動に疑問を持たれている方との関わり

今までいなかったキリスト者が震災以降に突然南三陸町を訪れて、子ども支援や仮設住宅での茶話会やコンサートといったイベントを行い始める姿を見て疑問を抱く人は多かったと思います。

「そもそもキリストさんが来た目的は？」

「支援はとてもありがたいが、滞在してまで助けてくれるのはなぜ？」

実際に質問されることも少なくはありませんでした。

当時私にとってこの問いに答えることは困難でした。福音を伝えることによって、その相手が必要としている支援を拒絶するようになってしまうのではないかと危惧したからです。実際に、福音を聞いた相手が支援を必要としているにもかかわらず、「宗教」が介入したことによって、その支援を受け取らなくなることがありました。

そうしたことから私は、震災という特別な状況においては特に「福音から支援」ではなく「支援から福音」を基にして活動続けました。そして、質問される方には、あの大きな震災による津波の後、私の中に「助けたい」という思いが湧き起こったことをお伝えしました。



南三陸クリスチャンセンター  
愛・信望館

#### ⑤ 地域に密着して学んだこと

「助けたい」「力になりたい」という気持ちだけで活動していると、たわいもない話で互いに笑い合えたり、感動を共有し合えることで、震災後に有名な言葉になった「絆」というものが何かを理解できるようでした。もしかすると私は初歩的なことを言っているのかも知れませんが、この「絆」は当時の私には分からないことでした。

私の場合は関係を築くという段階を踏むことで、福音を伝えるための備えもできることに気づくことができました。

「むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい。」（1ペテロ 3:15）

## ◆架け橋スタッフからお祈りのお願い

この度は地域支援ネット架け橋ニュースレター22号を手にとってください、心より感謝申し上げます。

3月10日、11日に開催された追悼会セレモニー「愛と希望のコンサート」には多くの方がご参加くださり、音楽と共に震災を悼む時をもつことができました。

今後も支援活動が続けるべく、啓蒙活動を行なっていきます。

一人でも多くの方が地域支援ネット架け橋の存在を知り、ひいては活動を応援していただければ幸いです。

南三陸町を主体にして中澤竜生氏が実践している「宣証」という活動を守るためには、年間300万円の活動費を必要としております。

皆様にはこの活動費が満たされること、地域支援ネット架け橋の支援の輪が広がること、現場で活動し続ける中澤竜生氏、佳子氏のためにお祈りくださいますようお願い申し上げます。

※活動の費用内訳については会計ページをぜひご覧ください。



# 尊いご支援に心から感謝いたします。

前回繰越金：51,000円

献金収入合計：985,000円（2018年3月1日～4月10日）

献金を捧げてくださった団体様及び個人様（敬称略順不同）

佐藤由紀夫、チャペルチャーチ、匿名、基督聖協団信徒会、基督聖協団相模原教会、  
ハワイホノルルチャーチ、埼玉県明るい社会づくり運動、基督聖協団越生教会、基督聖協団若潮教会、  
金原雅子、日本イエス・キリスト教団京都聖徒教会、IGL広島福音教会、清瀬グレースチャペル、  
基督聖協団飯田教会、新潟グレースネットチャペル、船堀グレースチャペル、岩崎豊稔、  
基督聖協団上田教会、基督聖協団八王子教会、基督聖協団青梅教会、八ヶ岳中央高原キリスト教会、  
基督聖協団ときがわ教会、東北ヘルプ、東部綾瀬キリスト教会、基督聖協団名古屋教会、仙台宣教センター

献金支出合計：670,450円（2018年3月1日～4月10日）

【内訳】車両費交通費（車検含）：172,000円、事務費/通信費：19,000円、啓蒙活動費：68,000円、  
ネットワークサポート費：20,000円、慶弔費：5,000円、追悼会支援費（内慰労会費）：30,000円、  
茶話会（cafe）地域/自治会コミュニティー支援費：11,000円、年中行事費：30,000円、  
困り事支援費：45,000円、雑費：20,450円、架け橋スタッフ費（5名）：250,000円、  
次回繰越金：365,550円

## — ご協力のお願い —

銀行名：七十七銀行 宮城町支店

口座番号：普通 5497795

名義：キリスト聖協団西仙台教会かけはし会計 中澤佳子

ゆうちょ銀行口座名義：地域支援ネット架け橋(チイキシエンネットカケハシ)

店名：二二九店(ニニキュウ) (229)

口座の記号・番号：02290-3-141031

当座：0141031

PayPal(ペイパル)を利用してクレジットカードの支払いができます。

\* これにより海外より応援していただくことも可能です。



PayPal検索用アドレス：yoshiko.n36@gmail.com

事務局：地域支援ネット架け橋

所在：宮城県仙台市青葉区愛子東3-14-22

発行元：山形県天童市三日町二丁目6-14

電話：090-1069-3925

活動スタッフ：中澤竜生、中澤佳子、中澤恵太

事務スタッフ：中澤義道、中澤愛美

◆お問い合わせはこちらのメールアドレスへ → [kakehashi.net@gmail.com](mailto:kakehashi.net@gmail.com)

◆地域支援ネット架け橋の活動内容はこちらのHPから → <https://www.kakehashi2013.com>